

## 日本語教育での教授法について ③

## 様々な教授法

語学教育には実に様々な教授法がある。日本語教育に關する「教授法」と銘打った本を読めば、必ずと言っていいほど出てくるのが、「文法翻訳教授法 (Grammar Translation Method)」「直接法 (Direct Method)」「オーディオ・リンガルメソッド (Audio-Lingal Method)」「TPR (Total Physical Response)」「CLL (Community Language Learning)」「サジェストペディア (Suggestopedia)」「ナチュラルアプローチ (Natural Approach)」「コミュニカティブ・アプローチ (Communicative Approach)」などである。他にもベルリッツ、グアンなど開発者の名前を冠したものを含めば、まだまだ挙げることもできる。日本語教育を志す者が教授法に関する本をたくさん読んで、概要をつかむだけで、具体的な教室での活動をイメージして、それらの教授法を自分の授業に取り入れるのは難しい。実際にその教授法で行った授業を文章化して本にまとめてあっても、その文章を読む個人が頭の中に描いているものは十人十色である。筆者も教授法に関する本をいろいろ読み、様々な教授法を知ってはいたが、実際にその教授法の授業のすべてを目にしたわけではない。

## 日本語教授法ワークショップ

古い話になるが、1995年に渡辺治則天理教語学院前校長から「日本語教授法ワークショップ」が大阪外国語大学であると誘いを受け、参加したことがある。いろいろな教授法については知識としては持っていたものの、実際にどんなことを行っているのか見たことがないので興味津々だった。このワークショップでは実際に留学生を相手にそれぞれの教授法のデモンストレーションを行うのだが、筆者にとっては衝撃的だった。「百聞は一見に如かず」とはよく言うが、実際に目の前でデモンストレーションはとて新鮮に映った。この時の様子は後に1996年にVHSビデオで市販され、さらに10年後、OPI (Oral Proficiency Interview) やコミュニカティブ・アプローチのデモビデオが追加され、DVD (日本語教授法ワークショップDVD 凡人社) に再編集されて市販されている。日本語教



日本語教授法ワークショップDVD

師養成講座などでも活用されているように思うので、日本語教育に携わっている人なら目にしたことがあるだろう。筆者もオーディオ・リンガルメソッドで授業を行っていたが、中級レベルの留学生を相手に、テンポよく練習していく様子を目にしたのは初めてで、こんなにリズムカルに速いテンポで行うのかと驚いた。ユーモアを取り入れながらも、しっかりと言葉や文型を訓練している姿が印象的だった。このワークショップでオーディオ・リンガル・メソッドのデモンストレーションをしていた中森昌昭氏は、米国國務省日本語研修所教官、大阪外国語大学、同志社女子大非常勤講師を歴任され、現在は名張国際交流研究所所長を務めている。また天理教名張分教会の会長でもある。中森氏に

初めてお会いしたのは、1990年筆者が天理日仏文化協会に勤めている時だった。毎年行われている文化協会の日本語教師養成講座の講師として来られていて、日仏文化協会の日本語教師養成講座の方も盛況であった。

## 理想の日本語教授法

いろいろな教授法があるが、これが王道だとか正統派だとか言うことはできない。ましてやこの教授法で授業を行えば短時間で素晴らしい効果が現れるといった、“魔法のような教授法”があるわけでもない。日々、現場の教師が自分の実践を振り返り、改善できる点があれば改善し、技量を高めていくものども思う。学習項目を効率よく教えるには、教師が講義調で詳しく説明していくような演繹的な方法を取ることも多い。最近ではPower Pointなどのプレゼンテーションソフトを使い、図や写真、あるいは動画なども取り込み、大量の情報を一度に提示することも可能になった。反対に学習者と対話しながら、常に考えさせ、自ら「気づき」が起こるように帰納的に教える方法を取ることもある。グループ学習で学習者同士が意見を交換しながら、新しい気づきが起こるように授業を展開するやり方を取っていることもある。しかし、そんなまどろっこしいことはやっていられないとか、教える項目がたくさんあるので、効率よくたくさん提示したいということもあるだろう。演繹的なやり方で授業を行うのか、帰納的なやり方で授業を行うのか二者択一のような問題ではなく、どの場面でのやり方を取れば学習者にとって一番いいかを教師が判断し、授業を展開していくことが大事なのではないだろうか。

## 講義形式の授業とインタラクティブな授業

大学の大学で行われている授業は講義形式の授業が多い。反対に少人数の学生を相手に対話しながら学んでいくインタラクティブ (interactive) な形式の授業もある。インタラクティブという言葉は「対話型の」「双方向的」「相互作用」という意味だが、教師側が学習者側に一方的に知識を詰め込むのではなく、学習者側から教師側に働きかけて相互にキャッチボールをするような形式で授業を進めていくことである。語学教育は会話の技術を身に付けるだけの教育ではないが、一般に講義形式の授業はあまり行われているとは思えない。講義形式の授業とインタラクティブな授業とを比較してみると、講義形式の授業では教師から学習者へ本当に知識が伝達されたかどうかは教師側にはわかりにくく、また一方的に情報を伝えているので、学習者に主体性を持たせることが難しい。授業自体が受身になり、教師が教える内容を暗記することが中心になる傾向がある。しかし多量の情報を学習者に伝えることができるため、主体性を持って学習したいと思う学習者には効果的な授業形態である。一方インタラクティブな授業では、学習者は伝達されようとする内容を自分の言葉に置き換えて発言して、自分の理解が正しいかどうか直接確かめたりすることができる。またその発言や質問を教師が聞くことにより、学習者が本当に理解したかどうか推し量ることもできるというメリットがある。授業をよりよくするために、教師は授業の形式についても考えていくべきではないだろうか。